
革命者

キング

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

革命者

【Nコード】

N8943A

【作者名】

キング

【あらすじ】

墮落しきつたこの世界を、俺たちが絶対に変えてみせる。

集会

平和という二文字を求続けた人間、しかし実際に完全な平和を手にいれてしまった二十八世紀の人類には、それ以上何の発展もない、墮落しきった生活が待っていた。

しかし、この平和ボケし墮落しきった世界に焦りを感じた三人の若者がいた。

クールだが頭の弱い田中、短気で喧嘩早いが身長百四十五センチでガリガリの御坊、体脂肪率七パーセント筋肉ムキムキ、まさに二十八世紀が生んだ筋肉マン、

だがいつもなよなよついたあだ名は『オトコオンナ』の山崎。

平和な世界を変えようとする三人、そんな彼らの戦いの火蓋が今、切って落とされようとしていた。

「じゃあまず、なにしようか」

地下に埋られたコンクリートの部屋の中で三人は話しあっていた。

「まずはよ、俺達の存在を世界にしらしめてやろうぜ」

「そんなことどど、どうやってやるのよ」

「山崎、もうちょっと男らしくできないかなあ。」

僕達はこれから世界を変えていくのだよ。その一員がそんなことでどうする」

「ごご、ごめんなさい、田中くん」

「もう、まあいいや」

一つしかない裸電球が照らす三人は、大きな溜息を吐いた。

しばらくの間コンクリートの箱の中を沈黙がただよった。不意に山崎がいすからたちあがり、喋り始めた。

「いい考えがうかんだぜ。ジャックするんだ、テレビ局を」

「なるほど。ジャックとはなんだ」

「つまり、テレビ局に進入して、スタジオを乗っ取る。そしてカメラの前に立ち、俺達の存在を世間にしらしめてやるんだ」

「そそ、そんなことしたら犯罪になっちゃうんじゃないの」

山崎に見つめられた御坊は、とたんに静かになってしまった。御坊は低身とガリガリな体がコンプレックスなので、長身でムキムキな体を見ると、どうしても弱気になってしまふのだ。

「山崎、いいかげんにしろ、甘ったれてるんじゃない。この今の世界ではな、正しいことが正しいとは限らない、間違いが間違ってるとも限らない。今は犯罪と言われても、長い目で見ればそれが正しいということもあるんだ。僕達は世界を変えようとしているんだ。このなんの危険もない世界は、生きるだけなら申し分ないだろうけれど、だめなんだそれでは、今の現状に満足して、向上心を失ったらずべて終わりだ。だから僕達は集まったんだろ、こんな世界を変えるために」

「ごめんね、ごめんね田中くん」

「泣くんじゃない、男だろ」

「ごめんね、ごめんね」

「よしっ、まず何をするかは決まったな。田中、テレビ局の地図を用意してくれ。山崎、前言った制服、できてるか」

「うん、でもあとちょっと、三十分もあれば縫い終わるよ」

「よし、頼んだ。俺は武器の準備をしてくる」

御坊がそう言いおえると、田中は奥の部屋へ地図を探しに、山崎は裁縫セットと作りかけの布きれを取り出し縫い始めた。

一方御坊は、武器調達に行く前に、トイレに行き鏡にむかってなにかぶつぶつとつぶやいていた。

「はあ、俺だってもう少し背が高くて、筋肉があつたら、田中みたいに山崎にビシッて言ってやれるのによ」

御坊は鏡を離れ、狭いトイレ内を、下を向きぶつぶつ言いながら何度も往復した。

ビシャツ。

水が肉を叩く音がした。御坊が顔を洗っていた。

「ああ、冷たい。よしっ、まずはこの計画を成功させないと」

御坊はそう意気込んで、トイレを後にした。

しばらくすると、地下室には三人すべての顔がそろっていた。

「よしっ、みんなそれったな。では成果の発表」

「三人分の制服できたよ」

「よしっ」

「特殊警棒三本、スタンガン三つ、ナイフ三本、準備完了」

「よしっ、二人ともご苦労。じゃあ机にちかづいてくれ」

田中がそう言うと、丸められ筒状になった紙を取り出し、机の上にひろげた。

「この世界にはもうテレビ局は各国一局しかない、無駄な視聴率争いを避けるためらしい。よく意味はわからんが、とにかく狙うテレビ局はこの『新日本テレビ』だ。新日本テレビは十四階建てのビル、入口は地下に一つ、僕達がねらう昼の視聴率七十二パーセント番組『こんにちは日本』のスタジオは十二階、入口には一時間交代の警備員が常に三人いて、各スタジオにはＩＤカードがなければ入れない」

「なるほど、ところで田中」

「なんだ質問か」

「なんでそんなにくわしいんだ」

「ボスに聞いた」

「なんだと、ボス」

「なんなのよ、ボスって」

「自然発生的にこんな集団できるわけないだろ。僕達はボスに集められたんだ」

「何者なんだ、そのボスは。なんでお前しか知らないんだよ」

「この計画が成功したら、あらためて紹介するみたいだ。期待してるってさ」

「ちつ、まずは成功させてからかよ。やってやろうじゃねーか」
計画はボスの指示どおりにたてられ、なんの問題もなく、実行の日
を迎えた。

いざ新日本テレビへ

三人は外装を真っ黒に塗られた、全部がスモークガラスの軽トラツクに乗り、新日本テレビを目指していた。

「なんでフロントガラスまでスモークなんだよ、見えにくくて仕方ない」

「ごめんね田中君。歩行者とかに見られないようにと思ってぬってたら、それになんかミステリアスな感じのほう喜んでくれるかなって思ってた」

「ぶざけるな山崎、運転しにくいんだよ。変わるか運転、変われないよな、お前免許ないからな、三人受けたのになんで俺以外みんな落ちてるんだよ。半分はコンピュータが自動で運転してくれてるのに、合格率九十八パーセントなのに」

「ごめんね田中君、ごめんね」

「泣くな山崎」

「おまえら俺をはさんで喧嘩すんなよ。その前に軽トラって二人乗りだろ、狭いんだよ」

「じゃあ御坊は荷台に乗ればいいだろ」

「いやだよこんな制服来て公衆の面前を走れるかよ、さらしものじやねーか。なんなんだよ田中このデザイン、なんなんだよこのフリフリ」

「ごめんね、御坊君が喜んでくれるかと思って」

御坊の目に、山崎の木の幹みたいな腕が映り、少し口をこもこもさせたかと思うと、黙った。

「だから泣くなって言ってるだろ。もうすぐ着くから、ビシッとしろ」

「ごめんね田中君。わかったから」

「わかればいいんだよ。よしあと約五百メートル、時間にして三分。

御坊、準備いいか」

「フリフリの制服以外OK」

「よしっ、山崎は」

「うん大丈夫」

「よし、目標物が見えてきたぞ。気を引き締めろ」

いざ新日本テレビ駐車場へ

意気込んだ三人を乗せた車の前を、一本のバーが遮った。

「あんたら用件は、ADか」

「いやっ僕たちは、今日四時からの『素人お笑い全国各地から集まって芸を見せ合いみんなで笑い合おう』に出演するために来たものですが」

田中が予想通り、というような笑みを浮かべながら答えた。

「おうそうか、ご苦労ご苦労五つ九四十五なんちつて。で、あんたらなんちゅうコンビや」

「いや僕たち三人なんでトリオです」

「おうそうかそうか草加煎餅なんちつて、すまんすまんスマトラ島なんちつて、で名前は」

「三人で『アンテナ』って言う名前で作らせてもらってます。のっぽの僕が『バリ3』、そののがたいの良いくらいの背の奴が『なんだか少し不安』、こっちのちっこいのが『ほぼ圏外』です」

「ああん、誰がちっこいのじゃボケ。ああん誰が圏外じゃボケっ。んな話聞いてねえぞ」

「御坊君おさえて」

御坊の華奢なからだを山崎の筋骨隆々な腕がおさえると、御坊はしゅんと小さくなった。

「おーうまいね、いい名前だ、いいねいいね胃粘液なんちつて。じやあががんばってよ」

「はい」

田中は満足そうな顔をしながら、あいたバーの下を車でぐり抜けで行った。

「おいっ田中」

「どうした御坊」

「なんなんだ、そのちっこいのってのは、『ほぼ圏外』ってのは。

馬鹿にしとんのかつ。特にひどいのが『ほぼ圏外』じゃ、なんじゃ
『ほぼ』って、わしゃ保母さんが、『ほぼ』つけられるくらいなら
『圏外』だけでいいわボケっ」

「いいじゃん御坊君。僕なんか『なんだか少し不安』なんだから。
僕のほうが四文字も多いんだから、ね、ね、だから我慢して」

御坊は山崎に止められ、また口をぐもぐもさせ黙った。

その間にも田中は順調にタイヤをころがしており、車は駐車場の端
のあまり人目に着かない所に止められた。

いざ新日本テレビ内へ

薄暗い地下の駐車場の端に置かれた、真っ黒で全面スモークガラス
ばりの軽トラのドアが、小さな音をあげながら開き、中から三人が
降りてきた。

「Jの2、しっかり覚えておけよ。僕たちが車をとめたのはJの2
だからな、すっと乗って逃げられるように、迷わずここにこれるよ
うに覚えておけよ」

「了解。で、田中入口はどっちだ」

「右にずつと行つて、突き当たりを左に真つ直ぐ歩いていけば、入
口だ。その前に持ち物の確認」

三人は一斉にごそごせやりはじめた。

「あるよ」

「あるぞ」

「よしつ、僕も問題なし。さあ行こう。で、どっち行くんだっけ」

「田中お前は馬鹿か、さつき左つて自分でいつてただろ」

「ちがうよ御坊君、右に行つて突き当たりを左に真つ直ぐだよ」

「御坊つ、馬鹿はお前だろ」

「うるせえ、んなことはどうでもいいんだよ。俺はさつきから血が
騒いでしかたねえんだ、くだらないことちまちま話してないでとつ
と行こうぜ」

三人はしつかり、右に行つて突き当たりを左に真つ直ぐ歩いた。す
ると、右手側に自動で左右にスライドし人を通す、大きく分厚いガ
ラスが並べられていた、その前には制服姿のごつい男が二人、三人
は無事入口を発見した。

「隠れろ」

田中がそう言うと、三人は鉄筋コンクリートの柱の影に隠れた。

「ここであの二人の男に立ち入りを許可されれば、IDカードがも
らえる。できるだけ暴力は避けたい、頭を使ってせめよう。」

「異議はあるか」

「異議なしっ」

「ないよ」

「じゃあ着いて来い。うまく話を合わせておけよ」

三人はひそひそと小会議をひらき、意見がそろうと行動に移した。

「君達止まって」

「あっはい、止まります」

「君達用件は」

「はいっ、『素人お笑い全国各地から集まって芸を見せ合いみんな
で笑い合おう』に出演するために来ました」

「ほう、証明とかできるかな」

「じゃあ触りだけ、のっぽの僕が『バリ3』」

「ちゅ、ちゅうくらいなのたしが『なんだか少し不安』」

「ちっちゃな僕が『ほぼ圏外』。ってふざけるなっ、だれがちっちゃな僕がや、なにが圏外や、ふざけんな」

「さ、さんにん合わせてアンテナでーす」

「おお、身長が大中小だからアンテナねえ、なかなか面白いじゃないか。じゃあこれがIDカード、これで『素人お笑い全国各地から集まって芸を見せ合いみんなで笑い合おう』のスタジオに入れるよ。がんばってよ」

「あっ、ありがとうございます」

三人は駐車場中に響き渡る声でそう言うと、扉の向こうに歩いて行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8943a/>

革命者

2010年10月9日21時02分発行